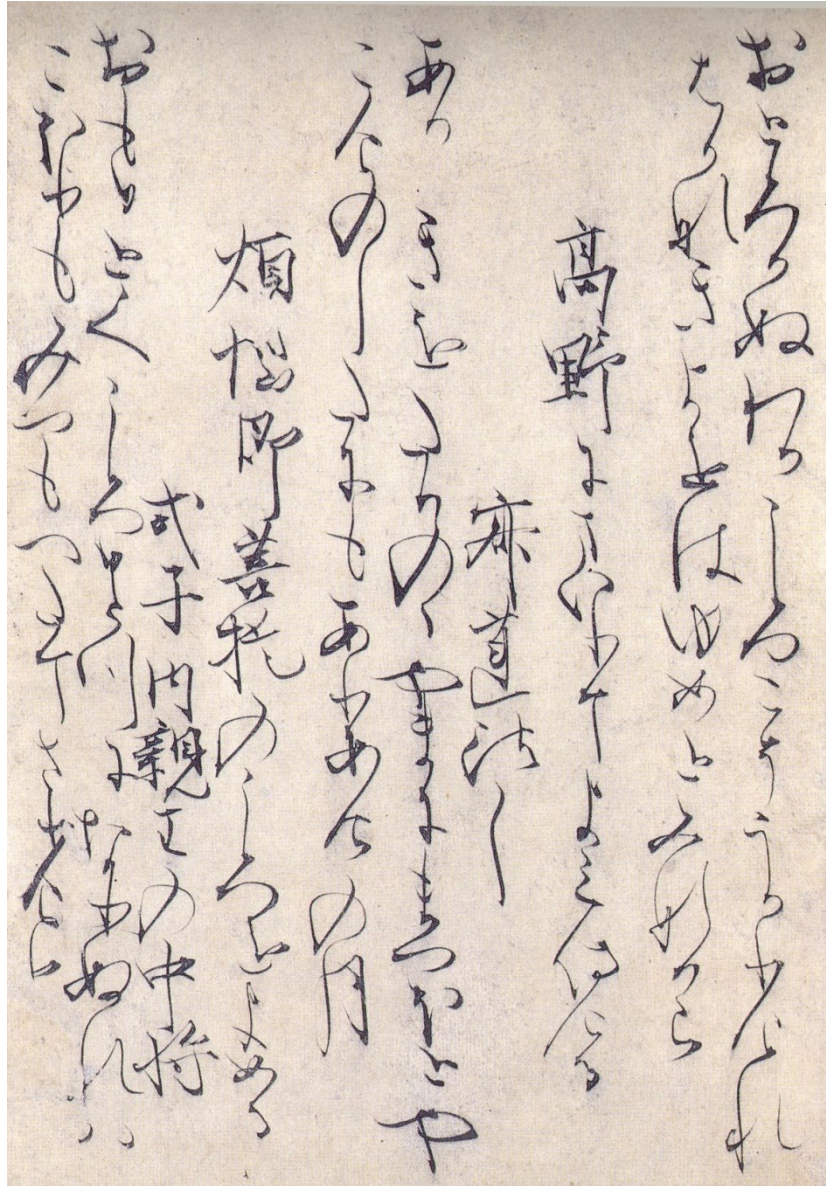


# 和歌と源氏物語 —古典の精華—



鶴見大学図書館

平成20年10月16日(木)～11月8日(土)

紫式部学会・和歌文学会 後援

## ご 挨拶

本展観にあたり、副題を「古典籍の精華」としたのは高田信敬氏の考えだが、大方に異論のない命名であろう。勅撰集を中心とする和歌と源氏物語とは、それ自体日本文学の大きな柱だが、その伝本群は、それぞれの作品としての存在意義につれて、質量ともに古典籍の中にも大きな位置を占めて、様々な意匠に彩られていることは、言うまでもない。

本学日本文学科は、久松潜一初代文学部長以来、歴代の教員が図書館の協力のもと、少しずつ古典籍の収集に努めてきた。その収書方針の柱の幾つかは、和歌、源氏物語と他の物語、軍記（特に平家物語と曾我物語）等、である。また、文学部には〈源氏物語研究所〉が置かれ、設立の準備段階を含め、限られた予算の中で、日本文学科とともに源氏関係の典籍の収集に当たってきた。

折しも、世に「源氏物語千年紀」と言い、また和歌文学会大会が本学で開催される。図書館の年間計画にこの時期を定めてもらい、書目に和歌と源氏物語を選んだ所以でもある。

本学図書館の古典籍の展示に際しては、単なる書目一覧にとどまらない解題を作成して、閲覧者に少しでも益がある展観にすることを目指している。今回も、文学部の高田信敬・伊倉史人両氏と目白大学の石澤一志氏の手によって、このような解題集を作成することができた。書写年代の判定などにご批評を得て、より良いものにしていきたいとも考えている。率直なご意見をお寄せいただきたい。

# 和歌と源氏物語 —古典の精華—

## 目 録

\* = 個人蔵

### I 勅撰集の古筆切

- 1 古今和歌集断簡 伝飛鳥井雅経筆 今城切 平安時代末期写 軸装1幅
- 2 拾遺和歌集断簡 伏見天皇筆 筑後切 鎌倉時代後期写 軸装1幅  
(参考)伏見天皇御集断簡 伏見天皇筆 広沢切 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉 \*
- 3 千載和歌集断簡 藤原俊成筆 日野切 平安時代末期写 軸装1幅
- 4 新続古今和歌集断簡 常光院堯孝筆 仏光寺切 室町時代前期写 台紙貼1葉

### II 古写本に見る勅撰集のかたち

- 5 新勅撰和歌集 伝伏見天皇筆 鎌倉時代末期写 列帖装2冊  
(参考)新勅撰和歌集 永青文庫本 模写
- 6 続古今和歌集 伝堀川康親筆・松崎俊章補写 江戸時代初期写 列帖装2冊
- 7 新後撰和歌集 卷11以下存 江戸時代前期写 列帖装1冊
- 8 新千載和歌集 伝中山定親・伏見宮貞常親王筆 室町時代中期写 列帖装3冊  
(参考)写字台旧蔵十三代集(新勅撰和歌集・新後撰和歌集・玉葉和歌集・新続古今和歌集)

### III 源氏物語の系統と伝本

- 9 源氏物語 須磨 青表紙本 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 列帖装1冊
- 10 源氏物語断簡 薄雲 河内本 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装1幅
- 11 源氏物語 空蝉・夕顔・末摘花・明石 河内本 室町時代後期写 袋綴4冊
- 12 源氏物語 濡標 別本 室町時代後期写 折紙列帖装1冊  
(参考)源氏物語断簡 別本 伝民部卿局筆 鎌倉時代中期写 台紙貼1葉 \*

### IV 古注釈が語る源氏物語

- 13 源氏物語古系図 室町時代末期写 折本1冊  
(参考)伝冷泉為相筆 源氏物語古系図断簡 鎌倉時代後期写 台紙貼1葉 \*
- 14 紫明抄(零本) 鎌倉時代末期写 列帖装1冊
- 15 河海花鳥抄出 室町時代後期写 袋綴3冊  
(参考)河海抄断簡 伝一条兼良筆 室町時代中期写 台紙貼1葉 \*
- 16 紫塵愚抄(零本) 室町時代後期写 袋綴1冊

〈新収資料特別展示〉 後崇光院自筆 名所百首和歌(応永四年)

# 解題

\* =個人蔵

## I 勅撰集の古筆切

筆跡の見事さ、流布本をはるかに凌駕する時代性、しばしば特異な本文を伝えること、料紙の工芸的な美しさなど、わずか1枚の紙片でありながら、古筆切は宝石のような魅力を備えています。当館所蔵の勅撰集名物切から、筆者の推定が可能なものを選び展示しました。古筆切は、水茎のうるわしさを賞翫できるだけではなく、時代や人を偲ぶよすがでもあるからです。

### 1 古今和歌集断簡 伝飛鳥井雅経筆 今城切 平安時代末期写 軸装 1幅

藍色斐紙（縦24.6、横15.9糎）に淡墨界を施し、5行書写。界の引き方から見て、丁のオモテ面と推される。巻10物名462・463に相当、左端1行分を削り落とした痕跡があり、元来は6行。古筆切の体裁を整えるために文字を削る例はしばしば見られる。掲出の断簡は藍色、他の例では白・茶・黄の料紙にも書写されており、4色の料紙を用いた華麗な典籍であったことを知る。

力強く重厚な書風は、古くから飛鳥井雅経（1170～1221）の手になるものと言われてきた。確かに雅経の筆跡と似たところもあるが、奥書部分（三井文庫蔵たかまつ帖所収）や『諸雑記』（京都大学附属図書館蔵）の記事等により、藤原教長（1109～1180）が治承元年（1177）に写したと推定され、同筆と考えられる資料に、二荒山本後撰集・和漢朗詠集長谷切・伴大納言絵巻詞書などがある。

他の断簡に比べて藍の色が濃いのは、青く染めた裏打ちの紙を用いたゆえである。「飛鳥井殿雅経卿 なつくさの〔守村〕」の極札、ウラに「了任」の墨印を押し、古筆別家了任（1629～1674）の鑑定。

### 2 拾遺和歌集断簡 伏見天皇筆 筑後切 鎌倉時代後期写 軸装 1幅

藍内曇料紙（縦27.9、横9.1糎）に巻20哀傷1311を3行に書写した、気品ある断簡。元禄10年（1697）古筆了珉極札の通り、伏見天皇（1265～1317）の筆跡と見てよい。能書の誉れ高い伏見天皇には、自らの歌集を写した**広沢切(参考)**が残り、格調高く整った勅撰集と闊達でのびやかな自家集との、幅広い筆技を窺うことができる。原態は卷子本、しかし多くの切に折り目が存し、一時期折本に改装されていたことは明らかである。古今・後撰・拾遺の三代集のうち、1巻分完全に残る後撰集巻20末（菅田八幡宮蔵）に「永仁二年十一月五日書写訖」とあるので、永仁2年（1294）天皇30歳の筆跡であることもわかる。

拾遺集の断簡、すなわち掲出断簡のツレには奥書の一部が伝存（三井文庫蔵『たかまつ帖』）し、藤原定家（1162～1241）の校訂になる貞応元年（1222）9月7日書写の本で、従来知られていなかった系統と判明する。書写者伏見天皇による若干の取捨改編も想定される（杉谷寿郎「拾遺集定家本貞応元年九月七日書写本考」『語文』78）。

仏典が裏文字で写っている切もあり、これについては石澤一志「伏見天皇筆「筑後切」一京極派和歌に於ける意味」（『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』所収）が『忠光卿記』康安元年（1361）6月6日条に見える「伏見院宸筆三代集、古今者被遣関東了、二代集被摺写涅槃経」以下の記事を、京都大学附属図書館蔵・中院文庫本によって裏付ける。

### (参考)伏見天皇御集断簡 伏見天皇筆 広沢切 鎌倉時代後期写 台紙貼 1葉\*

楮素紙(縦33.0、横7.2糎)に3行書写、金覆輪を施す。料紙中央に荒れが見られるのは、書き入れ(合点か)を削り落とした痕跡であろう。極札「後伏見院たひといは〔養心〕(ウラ「切甲午九〔神田道伴〕)のように広沢切を後伏見天皇の筆跡と鑑定するのが古筆家のならいであったが、父帝伏見天皇の手。自詠を書写した草稿本であるから、いわば普段着の書。中世屈指の名筆家が見せる自由で飾り気のない書の魅力は、類のないものと言えよう。今回の展示で初公開の資料。

### 3 千載和歌集断簡 藤原俊成筆 日野切 平安時代末期写 軸装 1幅

巻19 积教1235~1237を斐紙(縦21.5、横14.8糎)に10行書写、個性的な筆跡が躍動する。料紙の切りつめによって綴じ穴を確かめることは困難であるが、丁のオモテ面か。2首目「あか□き」は料紙の欠損。二重箱入、内箱蓋表に「日野切 おとろかぬ」、裏に「藤原俊成卿義〔花押〕」と墨書するのは吉沢義則(1876~1954)。古筆本家の極札「五条三位俊成卿おとろかぬ〔琴山〕」を付す。

藤原俊成(1114~1204)を伝称筆者とする古筆切のうち、俊成の手になると認められ、また自ら編纂にあたった千載集の断簡ゆえ評価の最も高いのが、掲出の日野切である。現在巻10以下の切が残るので、上下2冊のうち下冊が分割されたのであろう。『明月記』天福元年(1233)7月30日条の「家本之下帖」と何か関係があるのかもしれない。1帖140丁程度の典籍であったと推定され(田村悦子「藤原俊成自筆千載集日野切の考察とその集成」『美術研究』233)、その半分ほどが報告される。切名は日野家伝来にちなむか。烏丸光広(1579~1638)や冷泉為頼(1576~1627)の鑑定した資料も残るので、江戸時代初期にはすでに切となっていた。

千載集の成立をその序文にしたがって文治3年(1187)とすれば、日野切は俊成70歳以降の老筆とすることになるが、鋭角的な転折や速度感あふれる墨痕は、源平動乱の世を生き抜いた巨匠らしい迫力に満ちている。書写態度から、草稿ではなく一種の手控え本と考えられており、作者に細字注を施す例もある。

### 4 新続古今和歌集断簡 常光院堯孝 仏光寺切 室町時代前期写 台紙貼 1葉

料紙(縦25.6、横14.1糎)は緻密な仕上げで、斐紙にも見えるが、楮の打紙加工か斐楮混漉かであろう。巻17 雑上1730を詞書とあわせ6行に写す。詠者の「後三条入道太政大臣」は三条実冬(?~1411)、通行本と異同はない。極札「和歌所堯孝法印応永十六年〔琴山〕」(オモテ)、「応永十六年 切 西九〔栄〕」(ウラ)を付す。「西九」は寛文9年(己酉、1669)9月か。「仏光寺切」の名は旧蔵者を示すのであろう。この名物切は、時に飛鳥井雅世(1390~1452)と極められることもある。堯孝・雅世は『新続古今和歌集』成立に深く関わったので、どちらも伝称筆者としては申し分のないところだが、古筆了栄(1607~1678)の鑑定通り、歌僧堯孝(1391~1455)の筆跡と認められる。もとは卷子本、勅撰集の最後を飾る『新続古今和歌集』の編纂にあたり、堯孝は和歌所開闢(事務次官)となり、選者雅世とともに尽力した。したがって当該断簡は撰集の当事者が直接書写した伝本とすることになり、最上級の本文資料と評価される。

『新続古今和歌集』の古筆切としては仏光寺切の他に、よく似た筆跡で楮紙を用いた伝飛鳥井雅親(1416~1490)筆巻物切がある。仏光寺切と同一視されている事例も報告され(田中登編『平成新修古筆資料集』29)、ほぼ同じ時代の重要資料であるだけに、今後の徹底した資料搜索と料紙の差・筆跡の同定等詳細な分析とが望まれよう。

## Ⅱ 古写本に見る勅撰集のかたち

勅撰集には平安時代10世紀から室町時代15世紀まで、500年の歴史があります。それは古典文学の最も重要な部分を形成し、さまざまな典籍によって伝統はささえられてきました。ここでは二十一の勅撰集のうち、十三代集の個性的な伝本をいくつか展示します。

### 5 新勅撰和歌集 伝伏見天皇筆 鎌倉時代末期写 列帖装 2冊

寛喜二年（1230）に撰進の企てがあり、天災に加え承久の乱や天福二年（1234）仮奏覧の直後の後堀河院崩御、藤原定家の草稿焼却などがあり、文暦二年（1235）完成。新古今の妖艶な歌は減少し、かわって平淡優美の詠が多い。幕府関係者に配慮してかなりの数を入集させ、宇治川集の異名を持つ。掲出の二冊は、元来、各々別々の伝来の典籍だが、便宜上まとめて展示する。

上

全20巻を上下に分写したものの上冊10巻分、列帖装。浅縹地に瑞雲を織りだした金襴表紙（縦23・6、横15・3糎）は銀切箔を密に蒔いた見返しと共に後補。外題なし。内題は「新勅撰和歌集」。本文は斐紙に毎半葉9行和歌1首2行書き。書き入れなく、墨付139丁。巻1春上46番歌二行分削去の跡あり、その理由不明。この集は成立過程を反映して草稿本第一類から精撰本第四類に分かたれるが、それらのうち第四類に属し、特に定家自筆本の模本と相近い。掲出本を収める箱の蓋表に「新勅撰上後伏見院御筆」と墨書するが、識語・極札・折紙の類なく、何によってかく記したか不明。書風はたしかに鎌倉末期の伏見院流に倣うものである。

下

こちらは下冊10巻分に相当する。列帖装。萌葱色地に金泥の霞引・草花の下絵を描いた斐紙表紙（縦23・1、横15・2糎）は、楮素紙の見返しと共に後補。外題なし。内題「新勅撰和歌集卷第十一」。本文は斐紙に毎半葉9行、和歌1首1行書きを原則とするが、8行もしくは10行の部分あり。二筆による寄合書きで、墨付き160丁。訂正・補入若干、訂正は第二の手の部分に多い。虫損のほとんどない美本ながら、全12括のうち、第5括目の一部8丁分が第8括に誤綴され、卷十四恋四893～904、すなわち12首2丁分落丁、卷十六雑一の1078を脱す（目うつりか）等、書誌的に欠陥が見られる。精撰本第四類定家自筆本の模本に近似し、前掲本と同じく鎌倉末期の写。桐箱に「新勅撰和歌集 卷下（藤原定家撰／鎌倉末期古写本）」と墨書、これは森銚三の筆である。

### 6 続古今和歌集 伝堀川康親筆・松崎俊章補写 江戸時代初期写 列帖装 2冊

鬱金色地牡丹唐草文様裂表紙（縦16.7、横17.4糎）。見返し、金銀切箔散。外題、表紙左肩金砂子散霞引短冊「続古今和歌集 上（下）」（本文とは別筆）。内題、「続古今和歌集序」（真名序）「続古今和歌集卷第幾」。料紙、斐紙。毎半葉14行。字面高さ、約14.1糎、和歌1行書、詞書を約2字下げに記す。墨付、上帖5折97丁（錯簡あり。第2折と第3折の順序が逆に閉じられている）、下帖5折88丁。遊紙、上帖前1丁後2丁、下帖前1丁後3丁。

上帖の見返しに布目地金泥麻葉文様の極札様の紙片が貼付され（極印なし）、「堀川宰相康親卿（続古二冊、内一折／松崎殿俊章朝臣）」と記されている。指摘の通り上帖第4折のみ別筆で、改装の際の誤綴が第2折と第3折の順番が逆になっている。「堀川康親」はその該当者が見当たらず、松崎俊章は俊完（1609～1662）の次男として系図類（『系図纂要』藤原氏・小川坊城、『諸家伝』によれば万治三（1660）従四位上）に確認できる。

本文についてここで詳細を述べる余裕はないが、撰集途中で除かれた歌の多くを有する一方、切り入れられた歌も見られ（竟宴以後に切り入れられた歌2首を含む）、佐藤恒雄「石橋年子氏蔵『続古今和歌集』（巻下一帖）について」（中世文学研究21）で竟宴以前の姿を伝える代表的な伝本として上げられている京都府立総合資料館甲・乙両本に近似する。なお、上記補写の経緯は不明であり、当該部分が補写以前の本文を伝えているか否か、精査に及んでいない現時点では不明である。

## 7 新後撰和歌集 巻11以下 存 江戸時代前期写 列帖装 1冊

香色無地表紙（縦23・5、横16・2糎）には、左端に押八双が見られる。見返しは厚手布目斐紙に金泥で雲霞引き草木模様を描いた装飾料紙をあしらう。外題は、金霞引下絵の小短冊題簽に「新後撰和歌集 下」と墨書、表紙左肩に貼付。内題「新後撰和歌集巻十一」とあるように、二冊で書写されたもののうち、下冊のみの残欠本。一見して嫁入り本の離れと推測されるが、その本文は、右兵衛督（園）基氏の「むばたまのよはの枕におく霜のかさなるままに身こそふりぬれ」の異本歌を、巻17・1329番歌の次に記し、正保版本系ではなく、やや特異な伝本。本文料紙は鳥の子。毎半葉10行、和歌1首一行書き、詞書は3字下げでこれを記す。字面高さ、約18・5糎。奥書識語などはないが、筆跡および料紙などから、江戸時代前期の書写と判断される。

## 8 新千載和歌集 伝中山定親・伏見宮貞常親王筆 室町時代中期写 列帖装 3冊

鬱金色緞子改装表紙（縦26・1、横20・4糎）第1冊の現状扉（元改装仮綴じ表紙か）中央に「為定卿撰」と本文と別筆で墨書。後補左肩金揉箔散らし題簽に後筆で「新千載集 上（中・下）巻」と外題する。見返し金銀切箔散らし。本文料紙は楮紙。全体に虫損が多く、綴じも損なわれている。字面高さ約23・2糎、毎半葉11行歌1首1行書き、本文墨付、第1冊110丁、第2冊106丁（丁付け散見）、第3冊100丁。幕末狩野探信画の桜樹絵の板帙に今詠えの桐箱を具える。各帖巻首に「中山殿定親卿」（第1冊巻1～8、第2冊巻9～10、第3冊巻16～20）と「伏見宮貞常」（第2冊巻11～15）の筆跡とする朝倉茂入印の極札を貼付。第2冊の巻11巻頭と巻15巻軸に墨割印を捺し、その間が他筆であることを示すか。この伝称筆者をその現存真跡と比較するに、定親は真筆と断じて過たず、貞常もほぼその筆跡と見てよいか。中山定親は満親男、応永8年（1401）生～長祿3年（1459）9月17日没、正二位権大納言。貞常親王は伏見宮貞成親王の子、応永32年（1425）生～文明6年（1474）7月3日没、二品式部卿。両者の生没年よりして、おそらくは嘉吉～長祿（1441～1459）頃の書写かと推測される。

本文は新編国歌大観本（底本兼右筆二十一代集本）と比較するに、歌の出入りや歌順には大きな異なりはない。ただし、異本注記などの細かい異同に両者の対立を窺い得る。なお、補入符や小字書きや貼紙等による若干の本文補訂があり、また1837番歌の後に「〇—此間ニ哥六首被書落」と記し、現に1838～1843番の本文を欠く。なおまた、第1冊第8括りの5紙目（同括りの6・7丁）は本来第7括りと第8括りの間に位置すべき本文（＝658詞書～674詞書）を有するが、装丁の状態より見て当該本の錯綴とは考えにくく、この錯簡が親本に遡るかとも思われるがなお不明である。

延文4年（1359）の同集成立から百年内外の書写にかかり、筆者もしかるべき階層の人物であり、現在知られている諸伝本に比して一古証本としての価値を有する伝本と認められる。今後の同集の本文研究に資するところ大なることが期待される。



### (参考) 写字台旧蔵十三代集 (新勅撰和歌集・新後撰和歌集・玉葉和歌集・新統古今和歌集) 列帖装

写字台とは本願寺門主の便殿、すなわち常用の居室の謂い、歴代襲蔵する典籍および管理機構に「写字台文庫」の名が冠せられたのは、書物の活用に熱意ありし第17世法如上人の時代か。集書活動それ自体はさらに古く、室町後期皇室よりの下賜品、清原家との交流の結果もたらされた図書なども現存する。明治24年以降龍谷大学に譲られた分のみにても、42,000冊を数えるが、種々の理由によって巷間に流出した分も少なくない。

その一部が当館蔵となった十三代集は、飛鳥井家由来のものと推され、写字台を離れて転々本郷某書肆の獲るところとなり、数度にわたり市場に出されたものである。八代集の部もその全てか否かは不明だがその古書肆から売られており、元々は二十一代集揃いの写本であったと思われる。

その二十一代集の諸本は、宮内庁書陵部蔵飛鳥井雅章筆二十一代集(508—208)中と同一集を、おそらく雅章の監督下に、いわば副本を作るかの様に忠実に写した一連のものであろう。外題は、雅章の筆か、少なくとも十三代集の諸本の本文は装飾性を強くした際の、雅章の筆跡に似るようであり、おそらく近い人物の手になるものであろう。

新統古今集には、兼右本と同じ文明10年の飛鳥井雅康の本奥書が存するが、それに続く明暦の官本焼失を伝える雅章識語の部分は、書陵部本には存する花押が省略されている。

なお、ここに展覧する4集の筆跡は、A 新勅撰・玉葉・新統古今と、B 新後撰に分類可能なようであり、Aが最も雅章の手に近似するように見えるが、いずれもその周辺の書風であることは間違いない。

## Ⅲ 源氏物語の系統と伝本

『源氏物語』ほど、幅広くまた長く愛読された作品はないでしょう。しかしどのような読み方や議論をするにせよ、よりどころとなるものは物語の言葉・文章表現であり、言葉や表現は一々の本文に就いて確かめなくてはならないものです。ゆえに書物への理解は必要そして必然と言えます。書物に関心のない、あるいは知識のない研究者は、ちょうど魚の鮮度無頓着な料理人のようなもの、とてもあぶない。それはともかく、『源氏物語』本文の3分類—青表紙本・河内本・別本—にしたがっての展示です。理屈はどうあれ、書物のおもしろさをまず感じ取ってください。

### 9 源氏物語 須磨 青表紙本 伝冷泉為相筆 鎌倉時代後期写 列帖装1冊

墨流し地に金銀泥の霞引き・切箔・野毛等で装飾した斐紙表紙(縦17.5、横17.1糎)、外題なし。見返しは銀切箔を密に蒔く。「二はゞき」と墨書する扉紙は後補。もともと全体を4括とした須磨の巻の最初の1括が脱落し、帯木冒頭の1括りを取り合わせて1冊とする。帯木前扉に古筆了任「冷泉殿為相卿 ひかる源氏〔守村〕」の極札を押す。鎌倉時代後期写の掲出本は、当館所蔵『源氏物語』写本中最も古い。

本文毎半葉10行15字程度、須磨の巻には朱点。帯木・須磨いずれも青表紙本系本文ながら、飛鳥井雅康筆本とは小異あり。



## 10 源氏物語断簡 薄雲 河内本 伝藤原為家筆 鎌倉時代中期写 軸装 1幅

白斐紙（縦32.0、横25.7糎）に11行21字程度書写。朱の句読点あり。極札・折紙等がなく伝称筆者を明らかにしえないが、藤原為家（1198～1275）と極められた、ツレのそれに従った。書風・紙質より見て、元来は鎌倉時代中期に遡りうる堂々たる古写本。右端に4つの綴穴跡が残り、丁のオモテ面であったことが知られる。この綴穴は原態の列帖装を補強すべく紙縫綴した痕跡であり、古写本には珍しいことではない。

ツレを総合すると、賢木・薄雲・真木柱の3巻が同一筆者によるものと判明する。本文は明瞭に河内本の特徴を示し、朱点もまた河内本によく見られるもの。河内本の最善本は正嘉2年（1258）奥書の尾州家本であるが、掲出断簡はむしろこれに先行する時期の資料といえよう。鎌倉時代の『源氏物語』は、六半升形本（9源氏物語 須磨）が多く青表紙本、掲出断簡の如き大四半本は河内本と、書物の形が本文系統と連動する傾向があるところは、興味深い現象である。

## 11 源氏物語 空蟬・夕顔・末摘花・明石 河内本 室町時代後期写 袋綴 4冊

藍色無地紙表紙（縦22.8、横15.5糎）中央に蟬箋風の間合紙題簽（縦10.6、横2.2糎）を押し、「うつせみ」「夕かほ」「すゑつむ花」と墨書、本文とは別筆。明石の巻には題簽なし。表紙は相当古いと思われるが原装か否か不明。本文料紙、薄様斐紙。室町時代後期写と推され、書風はその時代の典型のひとつ。連歌師の手であろうか。4巻のみの不揃い本ながら河内本の特徴を伝える貴重な資料。空蟬・夕顔・末摘花と明石とは別手、前者は毎半葉10行、後者は9行書きである。「八州」の朱蔵書印。青表紙本系である玉鬘・胡蝶・橋姫の3帖とともに伝来、所謂取り合わせ本ではなく、2種類の本文を持つ底本により書写したものと思われる。

## 12 源氏物語 濔標 別本 室町時代後期写 折紙列帖装 1冊

利休鼠色地唐草模様の絹表紙（19.2、横13.3糎）中央に藍墨流し題簽を押し「みほつくし」と墨書。ただしこれは後補の表紙で、その下に本文共紙の原表紙があり、打ち付け書き「十一みほつくし」と読める。「十一」は勿論普通の巻序ではなく、並びの巻を勘案し物語り全体を37と数えたときの数字である。薄手の料紙を用いた折紙列帖であることが珍しい。毎半葉10行16字程度、各丁折り目部分に稚拙な文字で数字を記入。

『源氏物語大成』の時点で若紫・明石・濔標・絵合・松風・藤袴の6巻に別本本文が見つかっておらず、その後若紫・松風の別本が紹介されて残り4巻となった。掲出本は現在唯一の別本濔標。たとえばその書き出しは「さやかに見給ひし夢の後よりは」（掲出本）・「さやかに見給ひし夢の後」（河内本）・「さやかに見え給ひし夢の後は」（青表紙本）となっており、冒頭から特異な本文が現れる。翻字と詳しい解題も備わる（池田利夫「別本「濔標」巻写本の出現」『古代文学論叢』13）ので、参照されたい。

## （参考）源氏物語断簡 総角 別本 伝民部卿局筆 鎌倉時代中期写 台紙貼 1葉\*

斐楮混漉料紙（縦20.4、横14.9糎）に10行19字前後、若干の痛みがあるのは惜しい。朝倉茂入の極札「民部卿局 たのほに〔拜〕」を付す。藤原定家の女・民部卿典侍（1195～？）を伝称筆者とするが、その当否はともかくも、時代相応の鑑定であろう。総角巻には伝慈円筆の平瀬家本が別本として知られており、掲出断簡は平瀬家本の本文とよく一致する。5行目の異同が比較的大きく、「へのいとをこかましきをねたうてうれへも」を青表紙本では「へのをこかましきをいとねたくてうれへも」に作る。ツレは少なく、平成13年11月東京古典会入札目録に、やはり総角巻の1葉が見られた程度。

## IV 古注釈が語る源氏物語

鎌倉時代以降『源氏物語』の研究は盛んとなり、多種多様の注釈が作られました。系図は物語を読むための必需品として早い時期に登場しますし、先行の文献を増補して成長する注釈書もあります。簡便なハンドブック風のものから本格的な大部の研究書まで、その一つ一つが『源氏物語』に魅せられた人々の思いを伝えています。

### 13 源氏物語古系図 室町時代末期写 折本 1冊

市松模様の金欄表紙（縦31.8、横14.7糎）の大型折本、布目斐紙に金箔散らしの見返しは後補か。内外外題共になし。奥書識語等を持たないが、室町時代末期の写本であろう。本文は毎半葉4条の白界を施し、これを基準として系図線を引く。「先帝」より始まり「太上天皇」以下「和泉守」まで23系198名を掲げ、「そのすぢともしらぬ人々」「無名」と続く。系図の後に「きぬの色を人さまによりてさだめたる事」「人々のかたちを花によそへたる事」「居所事」を付し、所謂「源氏物語のおこり」で終わる形式。伝為氏本に近い構成であり、古系図の独自性が看取される。

数多い『源氏物語系図』の諸本は、三条西実隆（1455～1537）の整定した伝本とそれ以前の古系図とに大別され、掲出本は先述の通り古系図。「源三位・巢守三位・典侍」など現在通常の『源氏物語』には見られない登場人物が記載され、資料的価値が高い。古筆切を援用し詳細な検討も発表されている（久保木秀夫『源氏物語』巢守関連資料再考『平安文学の新研究』所収）。

#### （参考）伝冷泉為相筆 源氏物語古系図断簡 鎌倉時代後期写 台紙貼 1葉\*

藍内曇斐紙（縦27.1、横14.2糎）に2条の淡墨界を施し、記載の目安とする。江戸時代の古筆名葉集類には著録されないが、田中塊堂『昭和古筆名葉集』冷泉為相の項に「同（＝四半）源氏系図雲紙紙高九寸三分」とあるのがこれに当たり、卷子本であったことも巻物皺から判明する。美麗料紙を用い後京極流の筆跡が映えるこの断簡は、貴顕への献上・調度手本等、特殊な目的で調製されたことを想像させる。書写年代から見て明らかに三条西実隆のそれより古く、内容も古系図の特徴を持つ。

ツレは5葉ほど見つかっており、伝称筆者を藤原為家（1198～1275）とする切もある（出光美術館蔵手鑑『墨宝』）。書写時代としては、為相がより妥当か。

### 14 紫明抄(零本) 鎌倉時代末期写 列帖装 1冊

表紙を欠いた列帖装1括り分のみ。斐楮混漉き料紙（縦25.5、横17.4糎）に毎半葉10行2字程度書写。内題「紫明抄自 若紫卷至 花散里 紫雲寺隱侶素寂撰」。注項目に合点、注分2字下げ、8丁36項存。朱書き入れあり。

おそらくは『紫明抄』10巻を5冊に写した典籍のうち、第1冊の一部分が残ったもの。河内本『源氏物語』校訂者源親行（?～1277～?）の弟・素寂が將軍久明親王に奉った注釈書。永仁2年（1294）以前の成立、鎌倉時代源氏学を代表する著作である。

## 15 河海花鳥抄出 室町時代後期写 袋綴 3冊

栗皮色無地紙表紙(縦23.5、横17.2糎)は相当古いものだが、原装か否か不明。中央に「河海抄共二冊」「花鳥余情共二冊」と墨書する。元来四冊仕立て、現在『河海抄』抄出の上冊分を欠き三冊存。したがって『河海抄』は玉鬘以下を残し、『花鳥余情』抄出は完本ということになる。巻首に「延寿王院」の朱印あって、太宰府大鳥居家の旧蔵。大鳥居家は代々筑紫安楽寺留守職を勤めた家柄で、連歌とも縁が深い。

『花鳥余情』抄出末尾に本奥書「此四帖者、余五十有余之比、河海花鳥之中令抄出者也、今八旬之末、門弟有宗碩云・・・明応九年六月九日 宗祇□□」があり、成立事情も判明する。ちなみに奥書の「宗祇□□」は、「宗祇在判」とあったのを削り、書写奥書に見せかけようとしたもの。名匠宗祇(1421～1502)から最晩年の愛弟子月村斎宗碩(1474～1533)に贈られた。

『河海抄』『花鳥余情』は『源氏物語』研究史上有数の注釈書であり、今なおその学術的価値は高く伝本も少なしとしないが、抄出本はごく稀、他には島原松平文庫本と吉永文庫本の2本くらいであろう。特に後者は、掲出本と兄弟関係にあると言ってよいほど、似た本文を持つ。

### (参考)河海抄断簡 伝一条兼良筆 室町時代中期写 台紙貼 1葉\*

楮紙(縦27.1、横10.0糎)に、いかにも老筆と見える手で『河海抄』桐壺を6行書写。極札「一条殿兼良公いのちなかさの〔養心〕」の通り、一条兼良(1402～1481)の筆跡と断言する文献(『古筆学大成』24)もあるが、なお慎重に資料の出現を待ちたい。兼良に近い時代の書写ではあろう。原態を卷子本と見る説(前掲『古筆学大成』)は不可。丁のオモテ1面分が伝存しており(中村記念館蔵手鑑)、幅23糎程度の袋綴冊子本と推される。注目すべきはその本文で、確かに『河海抄』桐壺を書写内容とするが、いずれの断簡も中書本・覆勘本に一致せず、依拠本文は不明ながら抄出本と思われるからである。掲出断簡を例にとれば、「ゆゝしき身に侍れは・くれまとふ心のやみもかたへはるゝはかり・おもたゝしき」の3項を欠き、注文も節略してある。15 **河海花鳥抄出**との関係を調べてみたいところだが、こちらは前半を失っているので比較できない。とにかく『河海抄』享受のおもしろい資料である。

## 16 紫塵愚抄(零本) 室町時代後期写 袋綴 1冊

雲母引布目紙表紙(縦23.5、横19.8糎)は後補、内外題なし。改装時に下小口とノドの部分切りつめているので、読みづらい箇所がある。本文は2手の寄合書、奇癖に富む方の筆跡は聖護院道増(1508～1571)かと思われ、そうであれば『紫塵愚抄』の最古伝本のひとつに数えられようし、連歌・和歌に長じた貴頭の筆跡としても珍重すべき典籍。料紙、楮紙。毎半葉12行27字程度、巻1のみの零本であるのは惜しい。九曜文庫(中野幸一博士)旧蔵。

2冊から4冊まで種々の仕立て方あり、掲出本は書写内容から判断して、4冊本の第1冊に相当し、首尾若干を脱して伝わったと推される。現在帯木途中より明石前半まで存。伝岩山道堅筆本の奥書によれば、長享2年(1488)自然齋宗祇(1421～1502)が源氏物語のあらすじを3冊にまとめたもの、宗長(1448～1532)所持の本が2冊であり、その外題を三条西実隆(1455～1537)が揮毫したこと等は、『実隆公記』明応7年(1498)3月3日条に見える。一条兼良(1402～1481)を撰者とすることもあるが(『源氏男女装束抄』里村昌億序)、江戸時代中期の説なので、やはり宗祇の著述としてよかろう。朱の書き入れ少々、須磨「猶ひとひふつかををのつからへたる」を見セケチ訂正し「のほとよそよそにあかしくらす」と改めている箇所が目される。もともとの本文が別本、朱は青表紙本・河内本共通の異文だからである。他本との比較をさらに行った上でないと十分な結論は出せないけれども、宗祇が青表紙本に基づいて抄出したとする通説は、なお再検討の余地があることを示している。当該書き入れの部分展示了。

## 〈新収資料特別展示〉 後崇光院自筆 名所百首和歌(応永四年) 卷子本 一巻

本書は新出資料のひとつで、後崇光院貞成親王(1372~1456)の自筆の百首和歌詠草。書誌を示すと、卷子本、一巻。袋綴じの冊子本を改装したもの。牡丹唐草模様金糸織出の緞子表紙(縦26.6、横26.4糎)を付し、見返しは金銀泥で霞砂子引の下地に金銀切箔を大きく散らした装飾料紙をあしらう。表紙には外題なく、その痕跡もない。これらは改装時のものと思われ、後崇光院の手にかかったものではない。全長は、1紙41糎前後の料紙、9紙を継いで、約353糎。冊子時の虫損跡もかなり見られるが、本文の判読にはそれほど支障を来さない。冊子時には、縦27糎、横21糎ほどの大きさであったと推され、一面十三行・和歌一首一行書で、字面高さは約25糎、題は二字下げでこれを記す。本文料紙は、楮紙である。内題は「詠名所百首和歌 春 四辻入道左府點」とある。この「四辻入道左府」とは四辻善成(1326~1402)のことで、他にも宮内庁書陵部に蔵される「後崇光院御百番歌歌合」(伏一9)という、善成筆による点と、勝負付け・判詞・識語のある資料が現存するが、当該本もまた、後崇光院貞成親王の詠に善成が加点したものである。但し筆蹟を閲すると全巻一筆で、後崇光院が書写したものと認められるため、善成の筆により点を付された本があり、それをもとに、後崇光院が転写・清書したものが本書、ということになるのか。

内容は、建保名所百首題により詠まれた名所和歌で、100首全てが備わる。他資料との重複を調べたところ、100首中28首が『菊葉和歌集』に「従二位政子」(後崇光院の隠名)の詠として見られ、その一部の詞書きには「応永四年名所百首歌」とあることから、応永4年(1397)親王が26歳の時に詠まれたものと分かる(『菊葉和歌集』は応永7年(1400)前後に成立、伏見宮家周辺の歌人の詠を集め、勅撰集に備えて編纂された。現在巻14までが知られるが、本来は20巻仕立てであったと推される)。また本書には、四辻善成の合点評語以外に、「入法楽」と歌頭右肩に記された和歌があり(70・90番歌)、これが書陵部蔵「諸社法楽和歌」(伏一200)の中の「同(永享九年)五月十五日 三条法楽/石清水」とされるものの中に見られることから、本書は応永四年以降に清書されて『菊葉和歌集』の撰集資料とされ、さらにそのはるか後の永享九年(1437)に至るまで、折りに触れて利用されていたことになる。そして後崇光院の集『沙玉集』との重複は認められないことから、これまで他に知られなかった初期詠草の原本として、また後崇光院自筆の手沢本として、非常に貴重な資料と言うことができ、今後の研究に資することが大いに期待される。

歌名所百首和歌

春 日 入 遠 志 野 野

音 野 河

春の日の入る遠志野野の音野河

玉海

高 野

たのしい野

春 野

あまの野

高 野

あまの野

高 野

あまの野

高 野

あまの野

高 野

あまの野



歌名所

あまの野

還 心

あまの野

海 橋 立

あまの野

飛 鳥 河

あまの野

島 野

あまの野

原 市

あまの野

吹 飯 浦

あまの野

布 野

あまの野

長 橋 橋

あまの野

折 橋



冷泉公相序二冊



二



むつ源氏ふのみとくうんいま  
き礼給うたけりる小いやくめりき  
こくも信すまのよふしき、川をへ  
てつりそふがむあれさしこま  
のひそまひきあからへともをま  
かふしはふまも人もれんいさか  
さよまあふいと信をくしをへ、かり  
正んをらたきひらうか也あまの  
おたりきとてれてあひの、み将ふ

と秋がうのまゆのほく  
しと秋一うふあしん  
つとあくと秋まよ  
ゆがら中おとまゆのまゆさひの  
まき言まゆつとつたれとふか  
まにあまのれとつあまこつらとふ  
か、まゆまゆまゆまゆまゆまゆ  
いずれれれれれれれれれれれれ  
まゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ  
中くまゆまゆのまゆまゆまゆまゆ